

## アウサンガテ峰（6,384m）北壁初登攀を終えて

成 田 啓（北大山の会）

2023年5月17日から21日にかけて、鈴木雄大と私はペルーアンデス、ビルカノタ山群のアウサンガテ峰（6,384m）の北壁を初登攀し、山頂へ立った。今回の登攀について、いくつかの項目に分けて振り返りたい。

### 1. 遠征先の選定について

鈴木から遠征の誘いがあり、私がペルーアンデスを提案した。昨年も行っておりある程度勝手が分かっていること、費用が比較的安く済んだこと、煩雑な入山手続きなどがなく、そして何より魅力的な冰雪壁を有した6,000m峰が数多く存在することが理由だった。私が昨年行ったブランカ山群でも良かったが、こちらはかなり登りつくされている山域であり、出来れば未踏の山や壁を登りたいという希望のあった私達は別の山群について調べた。Google EarthやAmerican Alpine Journalなどを参照し、クスコ周辺にそびえるビルカノタ山群にも魅力的な壁を持った6,000m峰があることを知った。特にこの山群の最高峰であるアウサンガテ峰の北壁は高度差1,100mの荒々しいミックス壁となっており、登攀記録も見当たらない。更にこの壁は麓のパクチャンタ村からアプローチが10km未満、しかも村には温泉があり、入りながら壁を見られるという。アウサンガテ峰以外にも未踏の壁を持った山が近くにいくつかあり、仮に敗退したとし

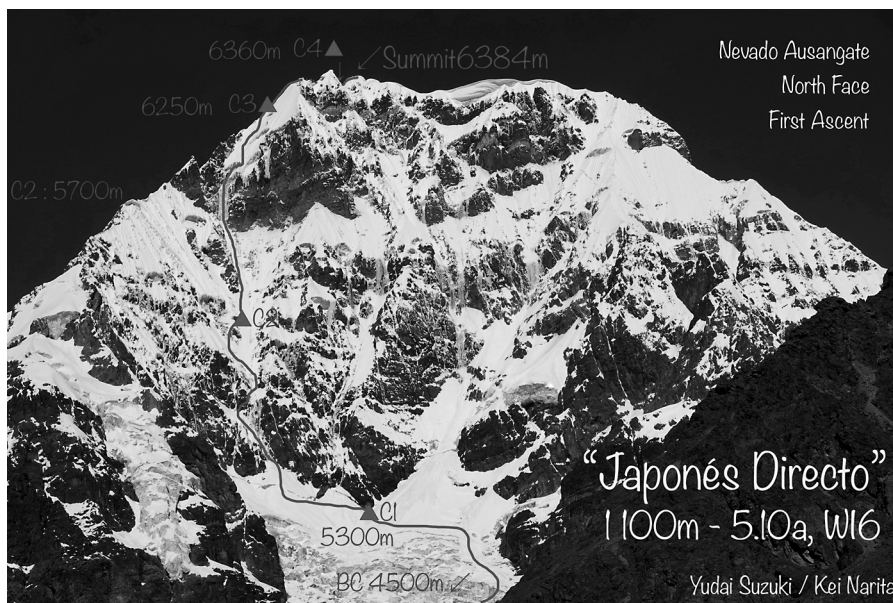


写真1 登攀ルート（写真・図＝鈴木）

てもいくらでも転戦できるということで、ビルカノタ山群を今回の遠征先とした。

私はこの遠征の時点ではまだアラスカとペルーという比較的小手軽な高所登山しか体験していなかったが、登山を開始するまでの手続きが簡素であるというのはかなり魅力的だと感じる。鈴木はネパールやパキスタン遠征にも何回か行っているが、今回の遠征で楽に登山を開始できるアンデスの山をかなり気に入ったようだった。これについては色々意見があるかもしれないが、実際の登攀をスタートするまでの日程と労力が少なければ少ないほど、その分本番の登攀に割ける体力とモチベーションを温存できるというメリットがあるのは間違いないのではないだろうか。私個人としては、何日もかけて山奥に入っていくような遠征もいつかはしてみたいと思うが……。

また、今回単なる山への入り口だと考えていたパクチャンタ村が思いの外快適で、ここのホステルをベースキャンプ（もはやキャンプではないが）とした。毎日温泉に浸かりながら壁を偵察でき、快適な小屋の布団で眠れる。キッチンで肉などを焼いて食べられ、宿の主人に頼めば料理も出してくれた。しかもWifiまである。標高は4,300mと高所順応にも最適な高さで、ベースとして非の打ちどころがなかった。村からはバスとタクシーで都会のクスコに戻れるという気楽さもあり、ここで完全にリラックスした状態で順応と登攀の準備を行えたのはかなり大きかった。これもまた、受け取り方によっては遠征らしさが希薄になり味気ないという考え方もできるが、今回の私達の登攀において、このノンストレスなベースキャンプの存在は大きかったと感じる。



写真2 村で温泉に浸かりながら壁を観察する。(写真＝鈴木)

## 2. 時期の選定について

ペルーは南半球にあるので、アウサンガテ峰北壁は北半球の南壁に相当し、日中は激しい日射に晒される。実際、様々な資料に写る北壁の写真をみると、黒々とした壁にうっすらと白い筋が続いているものもあれば、ほとんど途切れているものもあった。アプローチが良く、かつこんなにも印象的な壁が未踏のまま残されているのには何か原因があるはずだが、

その一つにこの壁の方角があると考えた。通常、ペルーアンデスの登山適期は乾季となる6月から8月だが、時期が進むにつれて北壁に強烈な日射が照り付け氷や雪が融け落ちてしまうため、一般的な登山シーズンにはこの壁の登攀は極めて困難なものになっているのではないかと予想した。そこで、今回は思い切って遠征時期を雨季の終わりと乾季のはじめ、すなわち4月中旬から6月上旬に設定した。4月は現地の登山家たちにとってもやや常識外れの時期だったらしく、クスコやパクチャンタ村でガイドに話を聞いても「4月は雪が多すぎる。クレバスも危険だ。」などの忠告をされた。

実際、クスコについた4月中旬時点では天気はやや不安定で、特に午後になると雨が降ることが多かった。登山を開始するまでは時期の選定を間違えたのではないかと少し不安になったが、4月下旬に差し掛かると徐々に一日中天気が持つことが多くなり、4月の終わりから5月はじめにかけて南東側のノーマルルートから順応と下降ルートの偵察を兼ねて一度登頂することができた。

本命の北壁は、4月下旬にまずパクチャンタ村に着いて偵察した時点で、日本出発前に資料で見たどの写真よりも白く、登攀可能性を感じた。5月に入るとほとんど毎日晴天が続き、日中は壁のあちこちで雪崩が発生し、壁の氷や雪は物凄いスピードで消えていった。私達の登攀は5月17日から21日に行ったが、帰国直前の6月上旬に再び北壁を見た際には壁はほとんど真っ黒になっていた。結果として今回の遠征時期の選定は正解であり、これよりも早かったり遅かったりしたら登攀は失敗に終わっていた可能性が高かったと考えられる。

## 3. 登攀ライン及び時間帯について

遠征出発前に北壁の写真を見て、登攀可能性のあ

るラインについて見当をつけていた。しかしこれは絶対のものではなく、基本的に現地で見て判断するつもりでいた。実際に現地に到着して壁を観察すると、おおよそ4つのラインが考えられた。右半分は比較的白く傾斜も緩そうだが、稜線から張り出すトラック大の雪庇のフォールラインに晒されており、更に壁に日が当たると雪崩がひっきりなしに落ちてきていたため選択肢からは除外した。真ん中のラインは最もダイレクトにピークに突き上げるラインだが、中間部の垂直の氷がかなり薄く見えうえに上部が傾斜の強い岩壁となっており、岩質もよくわからず可能性が低そうに見えた。壁の左端のラインは下部の傾斜が強く複雑な形状のクローワールで氷も繋がっているかよくわからないが、その上は快適そうな雪壁、そして上部の6,000m地点に100m級の垂直の氷瀑が控えている。僕達はこの氷瀑を北海道・雷電海岸の氷瀑「ナイル川」に例えて「ナイル」と呼ぶことにした。「ナイル」の上は60°程度の雪壁を登り頂稜に出て、200m程のリッジを処理すると頂上に出る。最も可能性の高いラインとしてこのラインを登攀することにした。

村で偵察して、壁は日が当たる時間帯はひっきりなしに雪崩が降っていることが確認できたので、「ナイル」より下部は基本的に夜間に行動することにした。夜間にアプローチの氷河を突破し北壁基部で幕営、翌日は夜間に下部の強傾斜クローワールを抜けてしばらく雪のクローワールを登ったところで朝のうちに兩岸の岩の基部で幕営、翌未明に雪壁を同時登攀で駆け上がり、「ナイル」を朝に登り上部雪壁に出ればあとは雪崩の危険性はほとんどないという見通しを立てた。そこからもう1日で山頂に立ち下山の4日間、予備日を足して5日間の日程とした。

#### 4. 装備について



写真3 登攀ギア。(写真＝鈴木)

登攀装備は写真の通りである。写真は下山後に撮影したためスノーバー1本やナッツ、ピトンなどルート上の懸垂下降で残置あるいは紛失したものは写っていないことはご容赦いただきたい。

まずロープについてであるが、比較的直線的なライン採りが予想されたため、クライミングロープとしてシングルロープであるベアール・ジョーカーゴールドエンドライ9.1mm×60mを使用し、困難な箇所でのフォローのユマーリング及び懸垂下降用にスタティックロープのペツル・ピュアライン6mm×65mを携行した。これによりロープ操作がシンプルになり、同時登攀と隔時登攀の切り替えがスムーズになることを狙った。また、持ち合わせていたダブルロープ2本を携行するよりも若干の軽量化にもなった。

同時登攀の際には、ペツルのナノトラクションとタイブロックを適宜使用した。リードがプロテクションを設置する際に、ナノトラクション等を介してロープにクリップすることによって、フォローが墜落した際にリードが引きずり込まれるのを防ぐことができる。これによりある程度の安全性を保ちつつ立ち止まることなく登攀を続行することができる。

靴は2人とも冬季用のシングルブーツを使用した(鈴木はスカルパ・ファントムテック、私はスカル

パ・レベルウルトラGTX)。今回の登攀では気温は最低でも-10℃程度であったため、より軽量かつ登攀性能の高いシングルブーツを選んだ。登攀中は基本的に足の寒さを感じることは無かったが、登頂時は早朝かつ風があったことによりやや冷えを感じた。

グローブは2人ともそれぞれ違うが、私は内側からニトリルゴム手袋、秀岳荘の黒軍手（厚手の化繊軍手）、裏地のない普通のテムレスLLの順番で着用した。今回はこれで全行程をこなしたが、念のためにウール手袋とオーバークローブも持参していた。

アイゼンは2人ともペツルのダートを使用した。フロントポイントは下部クローワール（ミックス壁）、中間部の氷雪壁、上部の垂直氷瀑の要素の異なるクライミングに幅広く対応するために、内側を長めにしたデュアルポイントにした。これにより、ミックス壁では細かいフットホールドに立ちこむことができ、かつ雪壁では安定感を得ることができる。今回はこれで特に不自由は感じなかったが、フロントポイントの選択にはまだ実験の余地があるので国内で色々と試してみたい。

アイスアックスはペツルのノミックを使用した。同社のクオークと迷ったが、下部のミックス壁と上部の氷瀑の登攀がテクニカルなものになると予想されたためこちらにした。結果的にテクニカルなピッチは合計5ピッチ程度であり、むしろ氷雪壁や雪稜を登るパートの方が長かったのだ、汎用性の高いクオークでも良かったのかもしれない。

プロテクション類についてはアイスクリューを12本、カム6本、トライカム4つ、ナッツ複数、ピトン6枚、ペッカー2本、スノーバー4本を携行した。今回の登攀では全て満遍なく使用したため、必要十分な量であったと感じた。

ガスはジェットボイルを使用し大サイズを2缶。今回はC1で水を汲めたので多少節約できたが、4泊

してあと1泊出来そうな程度余った。

テントはヘリテイジのクロスオーバードーム2〜3人用。軽量であることを最優先して選択した。広さとしては2人で泊まるにはかなり余裕があった。

シュラフはシートゥーサミットのスパークⅢ、フレイムⅢ。いずれもリミット温度-10℃程度、重量600g〜700gとこの温度域をカバーするシュラフとしては軽量だ。ほとんどの日程で問題なかったが、ピーク直下での最後の1泊ではやや寒かった。

マットは山と道のUL Pad 15+。100cm×50cm×1.3cmで113gと、他社のマットに比べると圧倒的に軽い。R値は公表されていないが、断熱性能も他社製品と比べて遜色ないか、むしろ温かいようにも感じた。欠点は引き裂き、切り裂きに対して弱いこと。

バックパックはリード用にブラックダイヤモンドのブリッツ28、フォロー用にブラックダイヤモンドのスピード40を使用し、リードザックにはリード用の水、行動食、ビレイジャケットを入れてそれ以外の全ての装備はフォローザックに入れた。

## 5. 食料について

朝晩はアルファ米、行動食は菓子類1000kcal前後を携行した。鈴木は日本から柿の種等を持参し、私は現地でクッキー類を購入した。しかし、クッキーは甘すぎて食べづらい上に粉々になってしまうのであまり良くなかった。次からは日本から柿の種を持参しようと思う。アルファ米の分量はC1では100g、C2では80g、C3以降では60gとした。高所の影響による食欲の減衰もあり、空腹感はなかった。また、行動食は余った。個人的には5日間程度の登攀であればもう少し食料を減らして荷物を軽量化することも可能だと感じた。

### 3. 海外登山記録

#### 6. 実際の登攀内容

【5/17 1日目】

晴 4,500m アズルコチャ (2:30)

→5,300m 北壁基部の洞窟 (6:00) = C1

(獲得標高800m)

夜間に出発し、偵察通りに氷河を突破し北壁基部へ。基部を少し歩きまわって壁を改めて観察し、登攀ラインを最終決定する。7時には壁に日が当たりあちこちで雪崩が降り始める。落下物から守られた完璧な洞窟テンバで昼過ぎに食事を取り、夕方前に就寝。



写真4 日中は雪崩の巣だ。(写真＝鈴木)

【5/18 2日目】

晴 C1 (0:00) → 5,700m ルーフ下 (11:00) = C2

(獲得標高400m 7ピッチ+計5ピッチ分の同時登攀)

22時に起き、0時に出発。気温が高く、氷が融けだして水飛沫の上がるクーロワールを登る。

1p目 成田リード、85度の氷雪壁をシャワークライミング～緩いクーロワール。60m、WI4+。

2p目 鈴木リード、緩い氷雪壁～垂直のチムニー状氷。60m、WI4+。

このピッチでリードの核心突破後に2人とも雪崩まがいのスノーシャワーを浴びる。敗退も頭をよぎるが、落下物のリスクの少ないクーロワール左の岩

壁に可能性を懸け、進むことにする。

3p目 成田リード、雪壁～ハンドからフィストのコーナークラック～ピナクルを掴んでトラバースして雪のクーロワールへ。40m、5.10a。

その後は右へトラバースして傾斜の落ちたクーロワール本流へ復帰。隔時登攀と同時登攀を織り交ぜてできるだけ安全そうな左端の岩陰や小リッジ状の氷雪壁にルートを採り進む。昼前には落下物がさらに増えてきたので、奇跡的に見つけた岩のルーフ下の小テラスを整地してビバーク。テントを張ってギリギリ2人横になれるスペースで回復できた。



写真5 傾斜の緩い氷雪壁を登る。(写真＝鈴木)



写真6 安全かつ快適なC1。(写真＝成田)

【5/19 3日目】

晴 C2 (3:00) → 6,000m 氷瀑下 (6:00)

→ 6,250m リッジ上 (14:30) = C3

(獲得標高550m 2ピッチ+計14ピッチ分の同時登攀)

暗いうちに出発。鈴木リードで標高差250m、7

ピッチ分くらいを同時登攀 1 ピッチで上部氷瀑「ナイル」の下まで。

1 p目 成田リード、10m程度の垂直氷を3つ登って小レッジまで。氷は硬く、見た目以上に厳しい。50m、WI5。

2 p目 鈴木リード、15mの薄被り氷～10mの薄被り氷～緩いクローワール状氷を15mで氷瀑を抜ける。核心。40m、WI6。



写真7 「ナイル」1ピッチ目。(写真＝鈴木)



写真8 「ナイル」2ピッチ目の登攀。(写真＝成田)

氷瀑落ち口の上には60度程度の冰雪壁と三段のセラックが控えており、急いで同時登攀でセラックを

かわすように登った。セラック帯を抜け、北東稜上部の雪壁に合流。昼になり気温が上がると雪壁がズボズボになりラッセルが酷くなったので、これ以上進むよりも翌朝締まった雪を登る方が効率的だと判断して雪壁と氷を削って泊まった。持参した黒ビニール袋に雪を詰めて敷いてスペースを拡張したこともあり、2人とも横になれ快適だった。



写真9 上部雪壁より振り返る。(写真＝鈴木)

【5/20 4日目】

晴→ガス C3 (5:30)

→ 6,360m山頂直下 (10:30) = C4

(獲得標高110m 1ピッチ+1ピッチ懸垂下降+計7ピッチ分の同時登攀)

3ピッチ分の同時登攀で小ピークへ到着。やはり朝は埋まらずに楽だ。そこから1ピッチ40m程、成田リードでリッジを進むが岩塔に行く手を阻まれる。スノーバーを埋めて1ピッチ50mの懸垂で東面の雪壁に降りる。そこから鈴木が同時登攀で4ピッチ分程伸ばす。頂上直下のプラトーでガスに包まれホワイトアウト寸前になったのでスープを飲んで時間待

ち。しかし一向にガスは晴れず、昇温でラッセルが酷くなっていることも鑑みてここで泊まることに。今日山頂を越えるつもりだったのにおあずけを食らい、意気消沈。寒さと頭痛、気怠さもありつらかった。しかし平らな所で泊まれたので気は楽で助かった。

【5/21 5日目】

晴 C4 (5:15) → 6,384mアウサンガテ山頂 (5:30-5:40) → 5,450m ノーマルルートMC (10:00) → 4,300m下山 (14:30)

(獲得標高24m 1ピッチ)

出発から15分で山頂。周辺の山が全て見渡せて報われた。風が強く寒いのでほどほどに景色を堪能してノーマルルートの下山に取りかかる。頂上稜線を2ピッチのクライムダウン、クレバス帯の処理、氷雪壁の3ピッチの懸垂、最後の氷河の下降をこなし安全地帯のモレーンキャンプへ。順応でノーマルルートの様子を完全に把握していたのでスムーズだったが、初見だとここも苦労しただろう。ここからまさかの順応時よりも増えた雪にズボズボはまりながら下り、久々の草原に到着。放牧されたアルパカの群れを脇目に、凶暴な放牧犬に怯えながら歩いて村にたどり着いた。

結果的に、下部クローワールで進路変更したことと、山頂直下で1泊が追加されたこと以外は、出発前に立てた計画通りに行動できた。

また、今回全ての幕営地が上からの落下物から守られ、かつ2人が横になれる広さであったために精神的にも肉体的にも回復できたのは大きかった。特に岩ルーフ下のC2は、まさに私達が泊まるためにアンデスの神が用意してくれたとしか考えられない素晴らしいものだった。

#### 7. 北海道でのトレーニング

今回の登攀では、普段から北海道を中心に国内で行ってきた冬季クライミングで培ってきた経験が活かしたとを感じる。神居岩でのドライツーリングでアイゼンとアイスアックスで強度の高いクライミングをすることに慣れ、そこで養った能力を小樽赤岩、雷電海岸ドーム壁などでの冬季トラッドクライミングや上ホロカメットク山でのアルパインクライミングに還元してきた。小樽赤岩といえば夏には札幌近郊のクライマー、山屋で賑わうゲレンデだが、厳冬期になると本格的な除雪を伴うテクニカルな冬壁となる。また、雷電ドーム壁は4ピッチの氷か7ピッチの岩を登らなければ取り付けない岩場ということもあって、訪れる人はそこまで多くなく、情報の少ない壁をルートファインディングしながらナチュラルプロテクション主体で登るトレーニングができる。また、上ホロカメットク山の冬壁は基本的に天気が悪いうえに、猛烈な除雪とプアなプロテクションに苦しめられることが多く、メンタルと確実なプロテクションワークを鍛えるのに最適である。

また、神居岩でのドライツーリング、千代志別でのミックスクライミング、その他海岸の氷でテクニカルな形状のアイスクライミングを登り込んで来た経験は、海外の壁で困難な氷に出くわしてもだいたいは越えられるという自信に繋がっている。

海外のスケールの大きい壁に出てくる、延々と続く60度前後の氷壁を登るトレーニングとしては、4ピッチ前後の氷瀑や氷柱が比較的近くに並んでいる層雲峡や雷電海岸の氷を1日で複数本継続登攀することが有効だ。

北海道の冬季クライミングで魅力的なのは、これらの全てにおいてアプローチが近く日帰りで行えるという点だ。アプローチが近い分の時間を他ルートとの継続登攀に充てれば、1日の登攀距離を稼ぐこ

とができる。

## 8. おわりに

今回の遠征は、私にとっては初めての「海外の未踏の壁」に登攀する経験となった。鈴木も学生時代にネパール・ラジョダダ峰（6,426m）の初登頂に成功しているが、このようなクライミング要素の強いルートへの初登は初めてだった。これによって、自分達のやってきた登山が、まだ拙い部分はあるものの、海外の未踏の壁でも通用するという自信を持つことができた。

この遠征を通して、このような未踏ルートの登攀では想像力が大事だと実感した。壁をどのような時期にどのようにして登るかを、様々な条件から想像して最適な作戦を立てるという能力が重要だと感じ

る。そして今回はその想像が上手く現実と当てはまったことが最大の成功の要因であったと思う。この能力は、普段のクライミングや登山で自分の想像力を働かせて行動すること、そしてその場数を踏むことによって培われるのだろう。今回掴んだこの感覚を忘れずに、今後も登山を続けていこうと思う。

---

## 日程

4/18 日本出国

4/19～20 クスコにて食料、燃料買い出し

4/21～23 パクチャンタ村（4,300m）へ行きアウサンガテ北壁偵察兼順応

4/24～5/4 アウサンガテノーマルルートより順応、5/1にピーク登頂

5/5～8 クスコでレスト、観光

5/9～10 パクチャンタ村へ移動、村周辺でボルダリング

5/11～12 北壁基部までの氷河の偵察と荷揚げ

5/13～15 パクチャンタ村でレスト

5/16 アズルコチャのホステルへ移動

5/17～21 アウサンガテ北壁登攀。5/21にノーマルルートより下山し、パクチャンタ村へ帰還

5/22～24 パクチャンタ村でレスト、アズルコチャのデポを回収

5/25 クスコへ帰還

5/26～6/7 別エリアの偵察、観光

6/8 帰国